
紅月は女神の祈り

中原まなみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅月は女神の祈り

【Nコード】

N3494Z

【作者名】

中原まなみ

【あらすじ】

——守るための、力をください——

その大陸には、伝説があった。赤髪赤眼の少女エリスは、「女神の使者」という宿命を背負って生まれてきた。しかし重圧に耐え切れず、自由を求めてある夜街を出る。わがまま幼なじみのアンジェラとの旅は、エリスを狙う男たちの出現によってきな臭さを増し始める。自らの宿命。真実。親友。苦い初恋。そして、女神の本当の狙いとは——？

紅き月と少女の奏でる、異世界冒険ファンタジー。王道ですが、主人公もヒロインも女の子のお話です。自サイトのものをこちらでアップしていきます。なろうの規定でR15ですが、自サイトでは全年齢対象になっています。原稿用紙1500枚、手元では完結済みです。 毎日更新。

紅き月 天空くソラ>に掛かりし刻
証を持ちて生まれし者

汝

月の子也り――

夜の帳が街に下りる。

ルナ大陸でも比較的都会にあたるここ、セイドウル・シティは、
それでもまだ闇にその場所を完全にあけ渡すことはなかった。

うすぼんやりとした街灯を眼下に見つめ、赤き少女は窓際の椅子
に腰掛けていた。

小柄な少女だ。年のころなら十四、五歳といったところだろうか。
動きやすそうな服や、首からぶら下がった真紅のペンダントも、
どことなくちぐはぐで――まだ、幼さを引きずっている。

だが、それよりもまず目を引くのは少女のその髪と瞳だろう。
短く切り込まれたショート・ヘアと、少し猫目気味の大きな瞳。
そのどちらもが、真紅。

彼女が首から下げているペンダントのそれと、同じ色なのだ。
肌の色からすると黄色人種だろうが――その艶やかな髪と瞳は、
あきらかに黄色人種としての特色ではない。

色素異常。そして、その首から下がっているペンダント――いや、
正確に言うなら、ペンダントの石。真紅の石。それらが意味するの
は、この大陸ではたった一つしかない。

すなわち——……

「あたしは……」

その少女が、軽く頭を上げた。頭上にあるのは、夜空。そして、その中に浮かぶ、少しかけた円——月。

「あたしは女神様の……」

少女の赤毛が、風に揺れる。

「おもちゃじゃ……ない」

少女の赤毛が、風に揺れる。

少女の赤眼が、月光に揺れる。

——夜の帳が、街に下りる。

緑が濃い。柔らかく降り注ぐ太陽光は、木々の合間からまるでレ
ースのように肌に模様をつけていた。

それにしても――

一体何匹目なのだろう。

エリスはそれを思うと嘆息を漏らした。二十三まで数えて、そこ
からは数えるのをやめた。数えれば数えるほど、疲れが増す気がし
たからだ。

斬り倒したばかりのそれ――見た目は狼、しかし鱗付きの魔物――
――を見下ろして、エリスは右手に持っていた剣を振った。剣につい
た血がびゅつと飛ぶ。けれど飛びきらない血油がぎらぎらと気持ち
悪い。血の臭いはとくに感じなくなっではいたが、やはり胃のあ
たりがむかむかとした。

――まったく、今夜の剣の手入れはいつもの倍はかかるだろう。

「あーもー、ちょーむかつくう！」

横手からの甲高い声に、エリスはもうひとつ嘆息を追加した。こ
の台詞は十七回目だ。こっちは倒した数より少ないので覚えていた。
それにしても、いいかげんうざったい。

「アンジェラー。だまってよもー。あんたの声でいらいらする」

「だって！ ちょーうざいよ！」

「だからそれはあんただって」

こちらを振り返ってくる少女に、エリスは半眼を投げた。ぷつと
頬が膨れているのは拗ねている証だ。顔を真っ赤にして、息も上が
っている。

紫色の瞳に、腰まである黒くつややかなウェービー・ヘア。エリ
ス自身と違って白人で、アンジェラの名前のとおり天使のような外
見だ。黙っていれば可愛いのに――とは思うが、悔しいので一度も

本人に言った事はない。幼なじみという照れくささもあるが。

「だって！ 多すぎ！ 何匹倒したのよう、もう。少なくとも三十は倒したわよう……」

「……三十超えてたか……」

再度、溜息。溜息ひとつに幸せがひとつ逃げていく、と聞いたことはあるが——だとしたら、あたしはこの瞬間にいくつ幸せを放り投げたのだろう、とエリスは苦笑した。

「ねえ、エリスう。何でいきなりこんなことになってるわけ？ ここ」

今さら聞いてくるアンジェラに、エリスは頭痛を覚えた。

「あんた……今まで何も知らずに戦ってたわけ……？」

「うん」

あっけらかんと頷くアンジェラに、エリスはこめかみをもんだ。

「……さつき、入るとき言われたでしょうが。大陸全土における異常現象のため、魔物が大量発生しています、って」

「……そだっけ？」

「聞きなさいよヒトの話！」

あまりにあまりな言葉に、思わずエリスは怒鳴っていた。アンジェラが人の話を聞き流すのはいつものことだが、自分の身が危機にさらされるような重大な内容まで聞き流してもらっては困る。

「だって、長いし。あの管理人の話」

「……ああもうー。わがまま娘！ 魔物が異常に発生してんのよ！

無駄に！ 多く！ なってんの！ 判る！？」

「そりゃ、戦いまくってるから判るけど。なんで？」

「……もーいい……」

その理由が判らないからこそ、最近大陸中で国家単位の会議が開かれているのだ。いまもその真っ最中で——エリスの両親も、アンジェラの父親もその会議に出ているはずだ。マグナータ家は騎士家系だし、アンジェラのライジネス家は男爵位を持っている貴族なのだから。しかしその一人娘がこれでは、なんともまあ——ライジネ

ス男爵は、子育ての才能には恵まれなかったらしい。

「あーもう。ほら、とつと進むよ。ティア・ドロップ見つけてさつさと帰ろう」

「えー。せつかくここまで来たんだから、旧神殿よって行こうよー」

「だったらさつさと進めつての！」

「あ、冷たいわねえ。せつかくあんたのお仕事手伝ってあげてる私に、そういうこと言うんだ、エリスは」

「頼んでないでしょ！？ あんた勝手についてきたただけでしょ！？」

「だって、ラスト・ミネア々々だから来たかったんだもん。でもこんな魔物多くなってるならやだー。帰ろうー」

（こんのわがまま娘……）

毒づく。アンジェラのわがままは今に始まったことではないが——こういう状況下でのそれは、普段と違って緊迫した意味を持ちかねない。魔物との戦闘。それが絶え間なく続くこの森——ラスト・ミネアの中では、ひとつのわがままからあっさり死を迎えてもおかしくはない。

「あたしは仕事なの。ティア・ドロップ二十本。とつとと見つけないといけないんだから。アンジェラ先に帰ってなさいよ、そんなこと言うなら」

「えー。やだ」

「……じゃあ黙ってついてくる！」

吐き捨てて歩き出すと、アンジェラが慌てて付いてくるのが判った。背中越しにアンジェラの気配を感じながら、ばれないようにほつと胸をなでおろす。ついてきてくれないと、困る。アンジェラは確かに魔導も使えるが、この森の中でひとりであれば、ものの十分とたたないうちに死体になりかねないからだ。自分で先ほどのような言葉が頭の中をめぐる。無駄に多い。魔物。

それに——実際、助かっている。エリス一人でも、この森は危険だ。剣の腕はかなりのものだと思自負してはいるが、それにだって限界はある。特にこういった対複数の戦いの場合、アンジェラの魔導

はかなり役に立つのだ。

「ねー、エリスう」

とことごと付いてきながら、アンジェラが思い出したように声をあげる。

「……何？」

肩越しに促すと、アンジェラは小首をかしげて、聞いてきた。

「資金、貯まってるの？」

その言葉に——ぎくりと心臓がはねた。

「……貯まってる」

エリスはアンジェラから視線をはずすと、前を向いたまま頷いた。知らず知らずに足早になっている。かさり、かさと緑を踏む音が耳に障った。

資金は貯まっている。——もう十分なほどに、だ。

「ふーん……ホンキなんだ？」

「……当然。何よ今さら」

「……別にいい」

トーンの低くなった声が気がかりだったが、エリスはアンジェラのほうを向くことは出来なかった。罪悪感が、それを許さなかったのだ。

(……言わなきゃいけないんだけど……)

いつ言えればいい？ どのタイミングで？ しかも今さら——？

今夜発つことにしているなどと、今さら言えるだろうか。けれど、何も言わずに発つことは出来ない。それだけは絶対に出来ない。十三年間。アンジェラが生まれてからずっと一緒だった。姉妹のような関係。それなのに——

「……エリス、来るよ。も——匹」

ふいに思考を割って、アンジェラの声が鋭くなった。緩んでいた気を引き締め、意識を戦闘モードへと切り替える。気配が——する。

「右だね……来たら、すぐ殺る。タイミング、お願い」

「オーケイ。……四、三……」

抜いた剣を握りなおす。相手に一撃の猶予も与えないで戦うほうが、ずっと勝率は上がる。そのためには、アンジェラの『能力』が役立った。

一瞬先の、未来を見る能力。

「二、一……今っ！」

「はああああああっ！」

呼気。右手にしていた剣を、真一文字に横に凧ぐ。それはエリスの意識というよりは、体が勝手に行ったような感覚だった。脳で考えるよりもずっと早く、体が反応していた。エリス自身が気付いたときには、手のひらに重い手ごたえがすでにあっただのだ。

その重さにぞくりとする——ひまもなく、それはあっけなく地面に倒れた。

「うーわー……」

倒れたそれを見下ろして、アンジェラが淡々と呟いてくる。

「ねえねえ、見て見てエリスう。腕が四本もあるわよ。気色わるうーい」

それは確かに、そんな形態だった。この森に入ってから、実にさまざまな魔物を目にしてきた。小鬼から、やたらどこかい蜂から、鱗狼にアメーバー状のよく判らない魔物まで。けれどこれはまた……なんとというかかったいな魔物だ。

大まかに見れば人型だろう。しかしアンジェラの言うとおり、人間で言えば肋骨にあたるような部位から、おまけといわんばかりに腕が二本伸びている。浅黒い肌は気持ち悪さを増大させて見えた。

「私こんなの初めて見たわよ。ねえねえ、これ、なんて魔物？」

「知らない。新種でしょ？ 最近やたら発生してるらしいし」

「ラスト・ミネアでも？」

アンジェラのきよとした表情。まあ疑問としては当然だろう。『神聖たる』旧神殿が置かれた『輝ける水の森』。ラスト・ミネア。そこにまで魔物が発生しているなど、今まででは考えられなかったことだ。それに付随して『新種』。けれど、事実は事実としてある。

「あんたの目の前にあるのが真実。それ以外にどう説明しろって？」
逆に問い掛けてみるが、アンジェラにしたらそんなものはどうでもよかったらしい。落ちていた木切れでつんつんとその死体をつついている。

「あーやつば気色悪いねー。燃やしていい？ 火葬火葬。わあ、アンジェラちゃんやつさしー！」

「……あんた、それで火事とか起こさないでよ……？」

「しないわよお、私エリスほど馬鹿じゃないもん」

あつさり言うと、アンジェラは口の中で呪文を唱える。本人の言うとおり、周りには何の被害も出さずにその死体は火に包まれた。しばらくして、燃え尽きる。

「魔導って便利だよねえ……」

思わず呟いたエリスに、アンジェラはにと皮肉な笑みを浮かべてきた。

「こんなの、子供でもできるわよ？ エリスが特別、おかしいだけ」「うるさいなあ」

確かにこの魔導大陸ルナでは、たいていの人間が苦もなく魔導を操れる。理由はよく知らない——というかエリスにしたら知ろうが知るまいが関係なかったので学んでいない。どうせ、向き不向きがある。エリスほど『魔導』に関して鈍いのは珍しいらしいが。

「あたしは、これがあるからいいの」

剣を指して見せると、アンジェラは何もいわず肩をすくめた。そのままてけてけと歩き出す。迷路のような森だけれど、アンジェラの歩みには不安もない。それもそのはずで、この森の道は十分に把握している。

昔よく、ここを遊び場に使っていたのだ。ここ、というよりはこの森の奥にある旧神殿を、だが。そこを『ひみつ基地』に使っていた。最も、ここ数年来ていなかったけれど。

「しかし、あれだよ。こんななってるなら、もうちょい警備増やしたほうがいいよね、この森」

「私たちが出入りしてたときよりは、ずいぶん厳しいじゃない」

「あれは、ほとんどなかったも同じじゃない。そりゃ、今は一応管理人と兵士が入り口守ってるけど……あの程度じゃ入ろうと思えば入れるじゃない。これ、やばいよ？ いたずら気分が入ったら、死ぬって、マジで」

「ま、そのあたりはあとでお上に言えばいいじゃない。——と、フェアリ・ベリーとうちゃあく！」

アンジェラが嬉しそうに走り出した。その先にあるのは、大きな湖だ。フェアリ・ベリーと呼ばれる湖——の、正確にはおおもとだ。セイドウール・シテイそのものが、このフェアリ・ベリーの上に乗っかっている水の都だから、ここだけをそう呼ぶのは適切ではない。まあ、そんなのは教科書で十分だろう。街の人たちも大概がそう思っている。ここが、フェアリ・ベリー。

アンジェラは湖のほとりにひざをつくと、そつと小さな手で水をすくった。のどに流し込み、大きく息をつく。

「あー、おいしーい！ 生き返るう」

エリスも一度周りの気配を確かめてから、同じように水を飲んだ。疲れきった体に、ひんやりとした水の感触が心地よい。血の臭いに麻痺した鼻すら、少しずつ回復傾向にある。森の匂いがした。

「さて、と。この辺りよね？ あの似非ぺんぺん草」

「……『ティア・ドロップ』です」

「似たようなものじゃない」

「違うわい」

ぺんぺん草と形状は似ているけれど、同じにしたら薬草の面目が立たないではないか。エリスの半眼をアンジェラはあっさりと受け流すと、ほとりを歩き始める。探しているのだろう。エリスもこっそり溜息をついて、同じように探し始めた。

「ふうー。これで、二十本ね！」

アンジェラの溜息に、エリスは苦笑して頷いた。持ってきてた布

袋に最後のティア・ドロップを放り込んで、口を閉じる。結構時間はかかってしまったが、何とか見つけることが出来た。

「あとは、これを……えーと」

「ジャックさんとここに届ければおしまい」

「あ、そっか。パズーのお父さまね。そんじゃ、行く？ エリス」

「あんたが素直に帰ってくれるなら、あたしは喜んで行くけど？」

くいつと親指で背後にある建物をさしてみると、アンジェラは慌てたようにまくしたてた。

「あ、だめ。ストップ！ 先に寄っていく！ 旧神殿！」

「だと思った。じゃ、行ってみようか。久々だし、あたしも嬉しいや」

エリスはにっと笑うと、アンジェラとともに旧神殿へ足に向けた。

ルナリット神殿。この旧神殿は、確かそんな名前だった。

最もそんな名前で呼ぶ人間は、ほとんどいない。ここは旧神殿。それでいいじゃないかというのがたいていの人間の考え方だ。エリス自身含め。

十数年前まで、ここは現役の神殿だったらしい。とはいえ新しい神殿が街中に出来てからは見向きもされなくなった。しかしそれが逆に、建物の頑丈さとあいまって『ひみつ基地』にはもってこいだったのだ。

多分、探せばまだあちこちに隠した宝物だのなんなのが見つかるはずだ。

なれた足取りで神殿内を進んでいく。ひんやりとした空気は、いつ来ても変わることがない。清浄なる神殿——ということなのだろうか。戦闘に疲れきった体には、心地よいことこの上なかった。

エリスはふと顎を上げた。高い天井に描かれた神話。

眉をしかめる。不愉快だった。

「なに、あんたまたあ？」

身じろぎしたのを見つけたのだろう、アンジェラが呆れたように言ってくる。

「仕方ないじゃん」

嫌いなものは嫌いなのだ。この神話のせいで、何度不快な思いをしたことが。

天井画には、真紅の月が描かれていた。フレスコ画——だろうか。ところどころ継ぎ目が見える。あまりこの絵の作者はフレスコ画に慣れていなかったらしい。

真紅の月と、それに重なるように描かれている裸身の女性——いや、女神。このルナ大陸を治めし月と戦いの女神、ルナ。その腕の中にいるのは、赤ん坊だ。赤ん坊の手のひらには、何か赤いものが

見えた。紅の石を握っているのだ。

「月の者、かあ」

「……うん」

エリスは小さく頷いた。剣を収め、手持ち無沙汰になっていた右手でそつと胸元のペンダントに触れる。

月の石。

今見上げていた、あの絵画の赤ん坊が握っているそれだ。紅の、ルビーにも似た色で、石の中に不思議な紋様が見える。

「紅き月、天くソラ」に架かりし刻、証を持ちて生まれし者、汝、月の子也り——だつてさ？」

アンジェラが天井画を見上げながら呟く。天井画に書かれた句を読み上げたのだ。エリスはこれ見よがしに舌打ちをした。アンジェラが眉をひそめる。

「あんた……いくらなんでも神話絵に舌打ちは、バチが当たるわよ……？」

「アイコン（聖像画）じゃないからいいの。てか、いくらでもバチもつてこい。どうせ今とそんなにかわりやしないよ」

「……そんなに嫌い？」

「嫌い。大っ嫌い。なんであんな神話のせいでただの人間じゃないなんていわれなきゃならないのよ」

「まあ、わかんなくもないけどさ」

アンジェラが肩をすくめて、さらに小声で続けた。

「世界に危機迫らんとするとき、女神は我が子を産み落とす——」

アンジェラの小さな声が、それでもエリスの耳に飛び込んでくる。嫌な言葉として。

この言葉で、何度からかわれたことだろう。逆に言えば、エリス自身が生まれたということは、世界が危機に瀕しているらしいということになる。

月の者——女神ルナの使者「エリス・マグナータ」。

「世界の危機とかいわれても、そんなもの知らないもん。あたし」

「まあねー。ま、いいじゃん？ ほつとけば。どーせ、セイドウル出ればそんな大きな問題じゃないでしょ？」

「知らない。国教に指定してるのはこの国だけだけど、それでも『大陸の女神様』だもん。割と信仰はされてると思うし」

「……そんなものかなあ」

アンジェラがくいと首を傾げるが、エリス自身聞きかじりだ。そんなものかどうかは——今夜からきつと、嫌というほど判るはず。

それから、会話が途切れる。お互い疲れていたし、何よりも今交わした言葉が、次の台詞を生み出せなくしていた。

無言のまま、神殿の奥へ奥へと進み——そして。

つとアンジェラが足を止めた。エリスもなんとなく同じように足を止める。

旧神殿の最奥部。女神の間——

嫌な感じがした。アンジェラはその感覚に理由をつけることはなかった。けれど、事実としてあった。嫌な感じがする——

広間に目を滑らす。あの頃とそんなに変わっていない。多少埃っぽくなって、老朽化も進んでいるだろうが、見た目には変わらない。だとしたら、何がそんな嫌な感じを生み出しているのだ——？

紅。

フラッシュのように意識に飛び込んできたそれが、視界の片隅に映っていた彫刻像だと気付くのに、数秒を要した。

アンジェラは反射的にそれをまっすぐと見つめた。

紅い月の、彫刻。細かい細工の施された、芸術品。アイコン——聖像画が現神殿に移されてからも、これだけは変わらずここにあった。昔からだ。それは変わらない、はずなのに——

（やだ。なんで……今日はこんなに気持ち悪く思うの？）

知らず知らずのうちに、喉が上下して唾を飲み込んでいた。不快感。

そして、見た。

(……!?)

思わず息を呑み、隣に立っているエリスの服を引っ張る。

「……エリス……あれ、何!？」

「何って……彫刻でしょ？ 前からあつたじゃない」

「そうじゃない!」

自分でも驚くほど、声音は悲鳴じみていた。

「ちゃんと見なさいよ!」

半ば裏返った声で叫び、震える人差し指でそれをさした。

「……え?」

エリスが戸惑いながらそれを見る。そして……息を、呑んだ。

その横顔をちらりと視界に入れて、アンジェラは苦々しく思う。

ああきつと、今同じ顔をしているわ、私たち。

——ツキイイイイイツ——

「っ!？」

唐突に響いた不協和音——そうとしか表現できない、耳鳴りではない何か——に思わずアンジェラは目を閉じた。

耳が、脳が、心臓が、痛い。痛い。

それでもよく判らない強迫観念に突き動かされるように、うつすらと目を開く。見たくない。けれど、見ないといけない。何故かは判らないけれど。

月の彫刻。女神ルナのイメージとして彫られたそれは、ただの彫刻ではなくなっていた。うすばんやりとした紅の光を放出し、そこから——

「……何。何か、映ってる……!？」

エリスが疑問符をあげる。アンジェラはかぶせるように悲鳴をは

いた。

「ちよつと！ 何か出てくるわよ！？」

紅。

今度は本当に閃いたその光は、瞬間その場を飲み込んだ。そして何事もなかったかのようにそれが収まると――月の彫刻の上には、人影があった。

裸身の、女性。

金色の髪はくるぶしまで届き、エリスと同じ真紅の目は、ただ真っ直ぐにこちらに向けられていた。眩しい――と思ったのは、光のせいなのか、それともその女性自身のせいなのか、それはアンジェラには想像すらつかないことだった。

ただ、判る。見てはいけない。見てはいけなかったのだ。きっと、美しすぎるこの女性を視界に入れてはいけなかったのだ。もう、遅いけれど。

その瞬間、運命の歯車は、回り始めてしまうから――

その時、だった。

「……」

エリスが無言のまま、一歩足を踏み出した。

「ちよ……エリス！？」

一歩。二歩。三歩。――もつと。もつと。いつものように慣れた歩き方ではない、どことなくこちない人形のような歩みで、彫刻に近づいていく。いや、彫刻に、ではない。あの、裸身の女性の影に、だ。

「やだ、ちよつと！ エリスってば！」

慌ててその腕をつかむ。だが、普段では考えられないような乱雑さで払われ、アンジェラはその場にしりもちをついた。

「エ……エリス……？」

こちらの言葉は、エリスには届かなかったようだ。エリスはその女性の数歩手前で足を止めると、ひざを折った。臣下の礼のように、頭をたれる。

ふいに気付く。エリスのペンダントが——あの、紅の月の石が、ぴかりぴかりと点滅している。まるで、何かに応えるかのように。

「……ルナよ」

「——！」

凍ったエリスの声に、アンジェラは弾かれたように立ち上がった。

「エリスッ！」

悲鳴が喉をついて出た。裏返ったその声にすら、エリスは全く反応しない。走り出し、エリスへと手を伸ばす——

キイン……

「……っあ！」

アンジェラはその場に転がった。何故？ 何故転がっているのだろっ——？ ただ、走っただけだ。エリスに近づこうと走って、それで——

（……壁！？）

ふいにその考えに行き着く。そう、走って、それで——弾かれたのだ。何かに。見えない何かに。

もう一度立ち上がり、今度はゆっくりとエリスの傍へ歩み寄る。けれど、やはり触れるか触れないかの位置になると、指先が何かに弾かれた。壁だ、壁がある。見えない、透明な壁が、そこにある。エリスとアンジェラの間に。

「やだ。やだ、やだやだやだ。何よこれ！ これ以上いけないなんて、何でよ！ やだ。エリス、エリスッ！」

錯乱しかけている。自分でそう思った。けれどどうしようもない。傍にいるのに、おかしくなった親友に手も触れられない自分がもどかしくて、どうしようもなかった。

けれど、目の前の、目の前にいる触れられないエリスは、変わらない調子で言葉を続けた。

「——我、此处に来たり」

「だめ！ エリス、エリスってば、この馬鹿！ 聞こえないの？ ねえ！」

見えない壁をバンバンとたたいてみる。ああ——パントマイムに見えるだろうか。パントマイムの大会があれば優勝だ、チクシヨウ。何で、とめられない？

混乱した頭の中に、ふいに声が割り込んできた。

『——月の者よ』

目を、見張る。誰の声だ——？ この場には今、エリスとアンジェラ自身しかいない。そのどちらの声でもない。だとしたら、可能性はひとつ。

アンジェラはぞつとした表情で人影を見た。月の彫刻の上に浮いている、裸身の女性。

「……はい」

エリスが、しっかりと頷いた。ということは、この声はエリスを呼んだのだ。目の前のあの人影は、エリスに話し掛けている。

『時、来たれり。』

汝、我が元へ来る事を拒まぬか……？ 』

淡々とした声。そこに意思などない。問いかけではない。確認でしかない。ひんやりとした、そう、この神殿内の空気のような声。

「拒みません。我が主、ルナよ」

（ル、ナ——！？）

薄々感づいてはいた。けれど、エリスの口からその言葉が再び発せられたとき、アンジェラの体に衝撃が走った。

大陸を治めし月と戦いの女神、ルナ。それが、そこに、いる——？
『なら、来たれよ。我が子よ。汝、月の子也り——』

ぞくり。

全身の毛が、粟立つ。何も考えられない、何も考えてはいけない。そんな気がした。震える指がカタカタと耳障りな音を発していた。それから気付く。いつのまにか、床にへたり込んでいたらしい。

カタ。カタ。カタ、カタ、カタ……

爪が、冷たい床を同じリズムで叩いていた。耳障りだった。けれど、願った。もっと、もっと大きな音なら良いのに！ この声を掻き消してくれれば良いのに！

しかし、そんなささやかな抵抗も願いも、意味はなさなかった。エリスの背中が、しつかりと、言葉を発した。

「——はい」

紅。

三度目の光が満ちた。それは、先ほどまでと違って、エリスのペンドントから発せられたものだった。

そして、それが収まったとき——人影はもうそこにはなかった。

沈黙。

「……え？ あ、あれ？」

その沈黙を割ったのは、なんとも間抜けな声だった。エリスだ。さっきまでのおかしなエリスではない。いつもの、エリスの声！

「エリス……！」

アンジェラは立ち上がった。途中で一度かくんとひざが折れたが、無理やり立ち上がる。

冷たい床を蹴って、ぼんやりとしたエリスの腕にしがみつく。しがみつけた。触れられる。大丈夫。

「エリス、エリスあんた、大丈夫！？」

「……何が？」

訳が判らないと目を白黒させているエリスに——どっと力が抜けた。再び床にへたり込む。

「うわっ、ちょっとアンジェラ!? 何、どーしたってのよ。疲れたの!？」

「……」

無言で首を振る。エリスは何も覚えていないのだ、きっと。

「……後で、話す。だからとりあえず、ここ、出よう」

薄い息の間から言葉を吐き出すと、エリスは困惑した表情で頷いた。

エリスに支えられて立ち上がりながら、アンジェラは混乱した頭を整理するのに必死だった。

少しか、はつきりしていることはある。

操られたのだ、エリスは。

女神、ルナに。

そして、女神は言った。

時、来たれり——と。

アンジェラの様子が、どうにもおかしい。

拗ねているのかなんのかは知らないが、無駄口ひとつ叩かずに、もくもくと前を歩いている。時折出てくるはずの魔物には、多分彼女自身の能力で先見したのだろうが、出てくる前に魔導を放っている。おかげで行きとは比べ物にならないほど、ラスト・ミネアの道は楽に進めたが——なんだか怖い。それに、多少の不安感がある。

アンジェラの使う火や土の魔導は、正確には確か法技と言う。それは魔導師としての能力だ。それはいい。使いすぎるとめまいや貧血に似た症状を起こすこともあるらしいが、そのあたりの加減はしているだろう。

だが、先見の能力。これは、法技ではない。限られた能力者——魔女、特殊能力者——が扱える『魔法』だ。アンジェラもまた、ただの人間ではないのだ。

その魔法は、アンジェラ自身そんなに操れるものではないらしい。自分自身によほどの危機が迫ったときや、身近な人間の身が危険に準じたとき——あるいは、神経が張り詰めているときに唐突に『見える』というのだ。行きはそれほどこの能力は発揮していない。それなのに、今は次々と『見て』いるのだろ。よくない兆候とも言えた。身の危険か、それとも、アンジェラの神経が過敏になっているのか——

いいかげん黙っていることにも疲れて、エリスは口を開いた。

「ねえ、アンジェラ。さっきからなに怖い顔してんの？」

「……知らないって気楽でいいわよね」

刺々しい。振り返りもせずに言ってくるアンジェラに、エリスはさすがに苛立って声をあげた。

「ちよつとなによ、つかかるなあ。あたしが一体何したつてのよ!？」

「……操られた」

ぽそりと言ってくるアンジェラの言葉に、エリスは目を瞬かせた。

「……は？」

——その時、ふいに殺気がふってきた。

「エリス、上ッ！」

鋭いアンジェラの声と同時に——いや、それよりも一瞬早く、エリスは後方に跳んでいた。右足首に着地の感触。それと同時に、銀色の光が迫ってくる。

「——ちっ！」

まだ地面についていなかった左足を、力いっぱい突き出した。影に当たる。

だが、牽制にもなりはしなかった。追いつがる銀光に、赤毛が数本飛ぶのを視覚で確認した。上半身をそらし、何とかよける。

「エリスに何するのよッ！」

アンジェラの甲高い声。

それとともに——影はいきなり真横に吹っ飛んだ。

「……！？」

息を整えながら、声の主——アンジェラのほうを振り返った。それから、思わず肩を落とす。

「……いや。あんたさ、もう少しこー、気の利いた助け方もあるんじゃないかと思うんですがあたし」

「贅沢言わないの」

アンジェラが拗ねて唇を突き出す。まあ、助けてもらっておいてその言い草はないだろうが、それにしたって、哀しいものがある。

（ナツプザック……）

アンジェラはとっさに手にしていたナツプザックで影をはたいたらしい。タイミングがかみ合ったせいかな、上手い具合に吹っ飛んだのだ。

つづりの間違ったへたくそな字で『あんじえら・らいじねす』と書かれた古ぼけたナツプザック。それ自体は別にかまわないのだが……それに助けられた剣士とは、ちよいとばかり虚しくもある。

(せめて魔導でふつとばすとかこう、戦闘らしい行動をして欲しいよ……)

「エリス、ヘンなこと考えてる暇あるなら、とつと剣抜いて。来るわよ。四人」

アンジェラの言葉に、呼吸をひとつはさむ。思考を切り替えて、気配を探った。いる、確かに。ゆつくりと、剣を抜く。飾りも何もない実用的な剣。人差し指が剣の柄についた古い傷に触れた。握るそれが、ジャスト・ポジションだと知っている。

と——吹っ飛ばされて地面に転がっていた人影が、むつくりと起き上がった。男だ。三十代だろうか——体のごつい、ただの男。特徴らしい特徴も見当たらない。

「……おはようさん。いったいどういったご用件でしょうか？」

皮肉を投げてみると、明らかに苛立った様子で唾を吐く。それで判る。戦闘のプロというわけではなさそうだ。

「……エリス・マグナータとアンジェラ・ライジネス、だな？」

「そうだけど、それが？」

「ていうか、馬鹿よね、貴方。私たちを襲ってから確認するなんて手順逆じゃないの？ お・じ・さ・ん？」

アンジェラが冷やかな目で毒を吐く。思わずこみ上げる苦笑を飲み込んで、エリスは続けた。

「ま、いいけど。お仲間も出といで。気配ばれだよ？ 隠しているつもりなんだろうけど？」

言いながら、気配のするほうに指を向けてみる。

「ほら、そこ。そこそつちも。早く出てこないとアンジェラの魔導で吹っ飛ばされるわよ？ この子、なんか知らないけど苛立ってるみたいだし」

「あら、違っわよエリス。出てきても吹っ飛ばす。てか出てきてから確実に吹っ飛ばす」

「……まあ、どうでもいいけど」

苦笑していると、観念したのかなんなのか——三つ、人影が出て

くる。

「うわ。無個性……」

アンジェラが呟いているのを耳にして、なんとなく頷いた。街中にいても埋没しそうな風体の男達。ごつい三十路男と四人そろったところで、大して強敵でもなさそうだ。

「……何故、判った」

「へ？」

「気配は消していたはずだ」

男の一人がそう言ったのを聞いて、エリスはアンジェラと顔を見合わせた。これ見よがしに盛大な溜息をついてやる。

「……ほんつと馬鹿ね、あんた達。ただのチンピラさん？ 確かに割と気配消すのは上手かったけど、あたし達襲うなら、下調べくらいしてきなさいよ」

「そうそう。エリスがやつたら気配に敏感だとか——この私の特殊能力が、一瞬先の未来を見ることが、とかね？ お・ば・か・さん」

あかんべーとアンジェラが舌を出す。その様子が、男達の頭に血を上らせたらしい。手に手にナイフや剣を持って迫ってくる。

が。

「ハイハイ、さようなら！ 渦巻け、大地の精！」

アンジェラが口早に唱えた呪文は、あっさりと法技と言う形になった。断続的に大地に爆発が起き、視界が土煙に覆われる。

げほげほつと咳き込む声が聞こえ——同時にエリスは怒鳴っていた。

「ちょっとアンジェラ！ あたし達の視界まで見えなくさせてどうすんの！」

「いいじゃん。エリスどうせわかるでしょ。あとよろしくー」

「……くそつたれ」

「下品よ、エリス」

アンジェラの軽い笑い声に促されるように、エリスは目を閉じた。

視覚を閉じ、それ以外の感覚を目覚めさせる。

思考は、いらぬ。ただ、体が動くままに――剣を振るう。

腰につけていた黒い布で、剣についた血をさつとぬぐった。それほど多くはない。致命傷は与えていないからだ。

腹部を抑えてうずくまっているのが二人。仰向けに細い息を吐いて、左腕から出血しているのが一人。もはやすっかり意識はないのか、うつ伏せになっている男が一人。その男の両足からは、これまた出血。

「うーん……鉄臭いことこの上ないわね。エリスってさあ、手加減できないの?」

「してるじゃんおもいつきり」

「てか、流血沙汰ばかり。無血で勝つ、とかそういう嗜好はないの?」

「無理。てか、これ両刃。どうあがいても、無理」

惘然とした表情で答えると、アンジエラはくいつと伸びをした。

「ま、いつかあ」

一言呟き、手近にいた三十路男の胸倉をつかむ。

「グッモーニン、ダーデイ? いい朝よー」

「……えげつな」

べしべしと遠慮なく頬を叩くアンジエラに、思わずエリスは呟いていた。

「なによ、文句あるならかわる?」

そう言われ、面倒だったので肩をすくめて手のひらを出した。もう何も言いません、どうぞご勝手に。

ふんとそっぽを向いたアンジエラは、そのままがくんがくんと男の胸倉をつかんだまま揺さぶった。

「おーきなーさーいーよー! ダーデイ!」

「いやそれはもういいし」

「……う?」

「あ、おはよう。ダディ
起きた。」

うつすらと目を開いた男が、状況を理解したらしい。ひっと小さく息をのむ。

動けないはずだ。両足を怪我している。もしそうでなかったとしても、動けないはずだ。戦闘にそれほどなれているとも思えない、男。今エリスが細く絞ってわざと出している殺気に、対抗できるとも思えない。

「さてさて、ダーディ。私、ダディに聞きたいことがあるんだけどなあ」

「……アンジェラ、怖いから」

「あんたの殺気のほうが怖いわよ。ね、ダディ？ 答えてくれるわよね？」

それにイエス以外の選択肢があるはずもない。なんともいえない、奇妙な怖さがアンジェラにはある。エリスはそれをよく知っていた。答えない男に、アンジェラは笑顔を向けた。無言はそのまま、あの子の中ではイエスになる。

「ありがと、ダディ。じゃ、まずひとつ。どうして私たちを襲ったの？」

「……何故、言わねばならない」

「ダディだから」

（うつわ……）

傍で聞いていて、思わず苦笑する。むちゃくちゃな理論展開。アンジェラだからこそ、だ。

「ダーディー。言わないと後でひどいわよあ？」

「……ま、さつさといったほうが苦しまないと思うよ？」

エリスにしても、とつとと理由は知りたかったので、そういつて剣を抜いてみる。ただの脅しだが、脅しはこういう場合本当によく効くのだ。

実際、効果はてき面だった。男はひっと息をまた呑み、震える声

をあげた。

「や、やめてくれ！」

「やめるから、言えつての」

冷ややかに告げる。男はぎゅつと下唇をかんでから、吐いた。

「……や、雇われたんだ、街の入り口で。ただそれだけなんだ！」

「街つて、セイドウールのよね？ 誰に？」

アンジェラが小首をかしげた。

「……おまえ達と、同じ年くらいの……ガキだ」

「子供お！？」

素っ頓狂な声をアンジェラがあげた。

「やだ、やだなあに？ 子供に雇われてるの？ 貴方？ うわ、ダ

ディそれはちよつと情けないわよ？」

「お、おどされ……！」

「脅されたんだ。うわ、情けなさ倍。それで、情けな脅されダディ

？ それは男？ 女？」

えげつない。

放っておいたら男が泣き出しそうだったので、エリスは割ってはいる。

「そこまでそこまで。……で、そいつは、何？」

ほつとしたように男が息を漏らした。アンジェラがつまらないと呟いているが、こっちは無視する。

「……少年だ。本人はダリードと名乗っていた。……かなり、腕は、立つ」

ダリード。

聞き覚えのない名前に、エリスはアンジェラと顔を見合わせる。

「知ってる？ エリス」

「知らない。聞いたこともない」

「よねえ。あ、あれかしら！ 遠くから見つめるだけの少年の淡い恋心！ もどかしくて、もどかしくて、歪んだ形で溢れ出る愛……！」

放っておこう。

アンジェラはとりあえず無視して、エリスは男に向き直った。

「——で？ その少年はなんて？ あたしを殺せとか？」

「おまえの……」

男がこちらを指差してきたので、エリスはきょとんと瞬いた。

「……の？」

おまえ『を』ではなくて？

エリスを殺せだとか誘拐しろだとか痛めつけろだとか——そういったものだったら『を』のはずだ。なのに『の』？

眉をしかめてもう一度問いただす。

「のって、どういうこと」

「……おまえの、ペンダントだ。それを、捕って来いと。それから、二人を殺せと。順番は逆でもいい、とは言っていたが。とにかく、ペンダントを捕って来いと言っていた」

「……月の、石を……！？」

アンジェラがぎょっと叫び声をあげた。エリスは、それすら出来なかった。

声が出ない。

震える左手で、そつとペンダントの石を握った。ひんやりとした慣れた感触。小さな石だ。もう幾度となく握ってきた形は、しっかりと手のひらが覚えていた。

月の石。女神ルナの使者、月の者が生まれてくる際握っている石——それを、狙っていた？

「……月の石を、この石を狙っていたの？」

「それをかどうかは知らん。ペンダントを、とっていただけだ」
(じゃあ、そうってことじゃない)

エリスはやや呆然とした意識の中で呟いた。月の石をペンダントという形にしたのはエリスの父だが、それに使われている紐はただの——本当にただの安っぽい紐だし、そんなものを狙うわけがない。石だ。石が狙いなのだ。

月の者の証である、石。だが、証以上の意味があるとも思えない。確かに握っていると落ち着いたりはしたが、それは生まれたときからのお守りみたいなところがあるからだろ。エリス以外の、例えばアンジェラなんかでも、そんなことはないと笑う。それはただの石だ、と。

では――何故、狙う？

宝石としての価値は高いだろうが――本当に希少品なんて狙うのはただの馬鹿だ。そんなものはあっさりと足がついてしまう。まして月の石など――売りさばくにはかなり不適切な代物だ。

狙われる理由が、思いつかない。それが逆に不安だった。よく判らない何かが、渦巻いている。そんな気がした。

「……そいつは、何者なの」

「知らんといっただろうが。ただのガキだった。少なくとも、見た目はな」

男が吐き捨てるようにいった。それから、ふいに思い出したように続ける。

「――と、ひとつだけ違うのは、おまえのそのペンダントの石と同じ物を、胸元につけていたことくらいか」

「――ッ!？」

アンジェラが息を呑む音が聞こえた。いやに耳に残る。

「月の石を……持っていたの!？」

エリスは思わずアンジェラを押しつけて、男の胸倉を引っつかんでいた。右手の剣が震えて小刻みに揺れる。

「そいつが月の石を、持っていたって言うの!？」

「そ……そうだ! そうだっ! は、はなしてくれ!」

月の石を持つのは、月の者だけだ。そのはずだ。

そして月の者は――エリス自身、自分以外には知らない。知らなかった。

もしそれが事実なら、そいつは――……

「じゃあそいつも月の者だって言うの!？ そいつはどこにいるの

！」

「落ち着きなさい、エリス！」

凜とした声に、錯乱しかけていた脳が静まり返った。アンジェラだ。

彼女はエリスの左手を男の胸倉からはずすと、きつとこちらを見据えていつてきた。

「こいつ、単に雇われただけよ。深いところまでは知らないわよ、きつと」

そう言うアンジェラの瞳が、あいまいに歪んでいた。

「……アンジェラ？」

「サイッターのタイミングね」

アンジェラが吐き捨てる。意味がよく判らなかったエリスが視線で問い掛けると、アンジェラは小さく首を振った。

「まあ、いいわ。とりあえずこいつら、役人に突き出しましょう。

その後で……話すから」

その後再び無言になってしまったアンジェラと一緒に、エリスはラスト・ミネアを出た。そこで、警護兵と管理人に男達を渡す。

「エリス！ アンジェラ！」

ふいに響いた声に、振り返る。

「……パズー。カイリ」

通りからこちらへ駆けてくる見知った人影の名を二つ、エリスは呆然と呟いていた。

丁寧に切りそろえられた黒髪に、高価なめがねをつけた少年、カイリ。

明らかに色彩を取り違えているとしか思えない服装と、金色の、気障ったらしい妙な髪形をした少年、パズー。

エリスとアンジェラの男友達だ。ひみつ基地もこの四人で作った——言ってしまうえばグループみたいなものだ。

その二人はエリスたちの前まで走ってくると、そろって膝に手をつけて身を折った。二人ともあまり、体力的なものはない。

「……何してんの？ あんたたち」

呆れたようなアンジェラの声に、まだしも体力のあるカイリが顔を上げてうめく。

「……心配してきたんですよ」

「心配？」

「……ぼ、ぼくの……」

と、パズーが途切れ途切れに言葉を発する。

「……父上が……依頼……」

「……ああ」

エリスはアンジェラと顔を見合わせて頷いた。パズーの父親、魔導医ジャックの依頼で、この森にきていたのだ。

ラスタ・ミネアに生えている希少種の薬草『ティア・ドロップ』を採ってくる。それが依頼だったのだ。

「……父上、知らなかった、らしくて……その」

「魔物の大量発生？」

助け舟を出してやると、パズーはこくりと頭を垂れた。

「ぼくが……気付いたら、とめた、んだけど……エリスも、父上も

……はなしてくれなかったし……」

「……ごめん」

気まずさにエリスはうつむいた。仕事をしているのは『計画』があるからだ。だがその『計画』はアンジェラにしか話していない。パズーにもカイリにも、幼なじみだというのに話していないのだ。

アンジェラが嘆息をついて、二人に向き直った。

「ま、ありがと。でも大丈夫だったわよ、とりあえずはね、一応ね、何とかね、私はね」

「……どうかしたんですか、アンジェラ？ ものすごく含みのある言い方ですけど……」

「べつつにー？」

訊くカイリに、アンジェラはぶいとそっぽを向く。そのカイリが疑問符を飛ばしてくるが、理由はエリスも判らなかったので肩をすくめてみせた。

アンジェラのわがままにはなれているのだろっ、カイリが微苦笑をもらす。

「……まあ、無事でよかったですけど。本当に……心配したんですよ」

「……ごめん、ありがと。パズーもね」

「……うん」

エリスが礼を言うと、パズーもカイリも穏やかに笑った。ずきりと、胸の奥が痛んだが——気付かないふりをした。

「……それで、エリス？」

アンジェラがふいにこちらを向いて、

「今日はこれからどうするの？」

問い掛けてきた。

「——……」

思わず答えに窮して口を噤む。

今夜、発つ。

言うのなら今が最大のチャンスだ。だが——

ふと、見上げる。パズーとカイリ、二人の男友達の姿。

「……どうか、したかい？」

眉間にしわを寄せるだけのカイリの変わりに、パズーが訊いてくる。

「あ、いや……」

さっと前髪をかきあげて、言いつくろっ台詞を探した。視線がいまいにさまよい、定まらない。

『計画』の話は二人は知らない。アンジェラには話したい。今夜発つと、今言いたい。だが、二人がいる前では……答えられない。

「……これから、あんたんち行くよ、パズー。ジャックさんの依頼、終わったから」

「……依頼、ですか」

カイリのあいまいな響きを持つ声に、エリスは軽く笑ってみせる。
「うん。冒険者のマネゴトしたくってね、ジャックさんをお願いしたの。だまってごめん。なんか、恥ずかしくてさ」

「……それだけですか？」

「そうだよ？」

大嘘だ。アンジェラの顔が皮肉に歪んでいるのを視界の隅で確認したが、どうしようもないので気付かないふりをする。

「じゃ、いこっか。心配してくれてありがとね、二人とも」

笑いながら歩き始めたが、カイリの顔にもパズーの顔にも、ただ疑問だけが残っていた。

パズーの家、魔導医ジャックの診療所を出てすぐ、アンジェラはぐうつと伸びをした。

そろそろ夕刻が街を覆いはじめている。どこからともなく、夕食の匂いが漂ってきているハイアシンス・カッレ（ヒヤシンス通り）を二人で進んでいた。パズーとカイリとはすでに別れている。

遠くなだらかな山並みに、オレンジ色の太陽が沈もうとしていた。水の都セイドウル・シティ。縦横無尽に運河が走り、入り組んだ街並みは、さながら水と人工物の迷路だ。エリス自身、この街で生まれ、十四年間暮らしてきたが、未だに『テリトリー』から外に出ると迷う。最もそれは、アンジェラ曰く『あんたが方向音痴すぎるのよ』。

その街中にある水路が夕焼けで赤く染まると、セイドウル・シティはとたんにオレンジの街へと変貌する。夕陽のせいだけではない。セイドウル・シティの建物は、大概が赤い屋根瓦で、それがオレンジの街へ変わる拍車をかけているのだ。

赤い屋根瓦と、水路に揺れるいくつもの夕陽。オレンジの街。

キラキラとしたオレンジ色の水格子が、建物の壁面を模様付けている。水路を覗き込むアンジェラの顔も、だ。

そのアンジェラが、こちらを向いて言ってきた。

「さーあつてと。ジャックさんの依頼も終わつたし、お給料ももらったし。パズーとカイリは追い払ったし！」

「……いや、そういう言い方はないんじゃない？」

「あんたにはさっきのことも話したし！」

「……」

思わず、沈黙する。アンジェラがちらりと意味ありげな視線でこちらを見てから、そばにある緑色のベンチをさした。

「座ろ。今日はもう、別に用事ないんでしょ？」

「……うん」

エリスは促されるままベンチに腰掛けた。目の前にある水路を、いくつかものゴンドラ（水路舟）が滑らかな動きで渡っていくのを見る。

用事がないなんて、大嘘だ。今、言わなければならない。

計画の実行日が今夜、だと。

今、言わなければ。

エリスはぎゅっと下唇を噛んだ。渴く喉に、湿った空気だけを送り込む。唾すら、もうでなかった。水路に行くゴンドラを目で追いながら、思い切って口を開く。

「……ごめん、ウソ。用事、ある」

言ってしまったから、引き返せないことに気付いた。心臓が、ぎゅっとわしづかみにされるような痛み。

「……用事？ 早く帰らないといけないの？」

「……ううん。夜中だから、今すぐ帰んなきゃいけないわけじゃないよ」

「夜中……？」

アンジェラの声が、いつもとは違う弱々しい響きでその言葉を繰り返した。表情はわからない。隣に座っているアンジェラの気配が揺れているのは判ったが、振り向くことは出来なかった。見たくなかった。見ることは出来なかった。

「……エリス、あんたまさか」

「……」

ひとつ、頷く。アンジェラが息を呑むのが判った。痛む胸をごまかそうと、ペンダントを握る。

「——今夜、出るつもり」

さらさらと、水の音がした。普段は意識しないと聞こえないはずのその音が、やけに耳障りだった。街の喧騒はまるで遠くて、別の

世界の音のようだった。

下唇を噛んだまま、エリスはただひたすらに前を見ていた。隣のアンジェラの顔を見られないばかりに。

下ってきた別の Gondra から、手を振ってくる人影を見つける。

顔見知りの Gondrier（Gondra 乗り）だ。エリスは緩みがちな表情筋に活を入れ、無理やり笑みを作って小さく手を振った。Gondra が、ゆっくりと視界から流れていく。

「……彼には、話してあるの？」

アンジェラの声。表情筋に頑張ってもらった笑みは、もろくも崩れて微苦笑になった。微苦笑——いや、もしかしたら、他人が見れば泣き顔にも見えたかもしれない。

「まさか。……今、あんたに話したのがはじめて。他の誰にも言っていない」

「……そう」

アンジェラの沈んだ声。ちらりと、アンジェラの顔を横目で見る。横顔は、水格子に揺らめいて、表情まではよく読み取れなかった。

「——急よね」

「……さつき、決めたから」

嘘だ。もうずっと前から決めていた。けれど、言えなかった。ただそれだけだ。でも——こういうしか、ない。

「……そう」

「ジャックさんの依頼料もあるし。もうずいぶん資金も貯まった。

……そろそろいいと思ったんだ」

顎を上げて、空を見る。いつのまにか、夕陽は山裾に沈んでしまっただけ。藍色と紫とオレンジのグラデーションが、空をかたどっている。

「……エリス」

アンジェラの強張った声に、エリスはもう一度視線をそちらに向けた。真っ直ぐな目が、こちらを見つめてきている。

「……本気で、するつもり？」

アメジストの瞳に、困ったような自分の表情が写っていた。
それでも、アンジェラは続ける。

「……本気でするつもりなの？ 家出、なんて」
家出。

それが『計画』だった。そのためにずっと、資金集めをしていた。
だからこそ、エリスはしっかりと頷く。

「する、よ。今夜、出る」

アンジェラの瞳が、揺れた。

「……ずっと、決めていたことだし。それに……」

限界だった。アンジェラの瞳から逃れるために、エリスは立ち上がって水路に数歩だけ近づいた。涙腺が緩みそうになっているのを自覚する。

（馬鹿だ。何であたしが泣く必要があるのよ）

今夜の事を決めたのはエリス自身だ。自分で決めて自分で実行しようとしている、ただそれだけだ。なのになぜ、涙腺は緩みかけているのだろう。

「……それに、もう、潮時だと思った」

「……潮時？」

頷く。水路に映った自分の顔があまりにも情けなく歪んでいるのを見て、苦笑がもれた。

「そう……」

一度大きく深呼吸をして、エリスはアンジェラに向き直った。アンジェラの、いつもならキラキラと輝いている紫の瞳が、薄ぼんやりとしか光を宿していなかった。

「——今日、襲われたでしょ？ この」

と、胸元のペンダントを掲げてみせる。

「この、月の石が目的みたいだった。それに……その依頼をした奴は、もしかしたら……そいつも月の者かもしれない」

アンジェラが俯いて肯定した。

「その可能性は否定しないわよ。あんたと同じ月の者——女神ルナ

の使者」

魔導大陸ルナ。女神が治めしこの大陸で、女神の使者として時折産み落とされる存在があった。

紅の月——俗にローズ・ムーンと呼ばれる月が、夜を飾るその時、月の石と呼ばれる一欠けらの赤い石を持って生まれてくる子供。

月の者。それがエリスだった。

ローズ・ムーン自体は珍しいことではない。それは自然現象としてある。月の高度が低いとき、ちょうど夕陽と同じように光の屈折率が関係して赤く見える。自然現象の関係で、それは夏に見える場合が多い。

それだけなら問題はない。ローズ・ムーンの夜に生まれる子供は少なくない。

だが、それに月の石が加わると話は全く伝説じみってくる。

冬生まれのエリスが、紅の月の石を持って、ローズ・ムーンの、しかも満月の夜に生れ落ちたのは、それはそのまま彼女自身が月の者であることを意味した。

そしてそれは、エリスにとって——苦痛以外の何ものでもなかった。

「……そう、ずっと言ってたでしょ。あたしは、月の者になんて生まれなくなかった」

それは、アンジェラも同じだっただろう。魔女。特殊能力者。奇異な存在は、そのまま奇異な目で見られる。大人たちは重宝したが、子供はあからさまに疎外感を示した。どっちにしろ、嬉しい反応ではない。

アンジェラから目を離し、再び水路に向き直った。

エリスは、手持ち無沙汰になった手で、地面に落ちていた煉瓦の欠片を拾い上げる。それを、水面に向けて投げながら、続けた。

「けど……このままここにいたら、そう言う目から逃れられない」
パシ、パシ……パシャン。

二度水面を跳ねた煉瓦の欠片は、三度目で水路に沈んだ。藍色の

水路が、水模様を立てる。

ここに、ルナ信仰の国セイドールに居続けたならば、ルナの使者という人々の目から逃れることは出来ない。

だから——出る。この街を。この国を。

「それに……あんた達にも迷惑かけるし、今日みたいだね」

「……」

月の者だから襲われた。石を持っていたから襲われた。そして——それで、アンジェラを危険な目にあわせた。それは事実だった。

「……だから。もう、そんなのは嫌だから。あたしは、あたしのやりたいように、生きたいように、生きる」

再び、振り返る。戸惑いも何も過ぎ去った、アンジェラの真っ直ぐな目を見つめ返す。

そのアンジェラが、口を開いた。

「私のためでもあるって、そういいたいの？ あんたの家出は、私を危険な目に合わせたくないから、そういいたいの？ だったら言うておくわ。ありがた迷惑って言葉、覚えときなさい」

その言葉に、エリスは思わず笑い声をもらした。

「あんたなら、絶対そういうと思った」

アンジェラらしい、真っ直ぐな言葉。くつくつと笑い声が漏れた。

「——でも、違うよ。これは、あんたのためじゃない。あたしのためだ」

そう言うのと、アンジェラは無理やりだろう、頬に小さな笑みを浮かべてきた。

「……そ、勝手になさい」

「……ごめん。アンジェラ」

「謝る必要なんてないでしょ。私はあんたの彼女でも家族でもないんだから」

どこか突き放すような言い方に、胸の痛みを覚える。そう仕向けたのは自分だ。

けれど、言わずにはいられなかった。

「……家族、みたいなものだよ。姉妹って言うの？ ……ずっと、一緒だった」

アンジェラが生まれてから十三年。ずっと一緒に育ってきた。二人で怒られたこともある。二人で笑いあったことも幾度もある。喧嘩もしたし、何日も口を利かないことだってあった。それでも、ずっと一緒だった。はじめてのおつかいやら、学生時代の思い出やら、そう言ったものの隣には、必ずアンジェラがいた。

血は繋がっていない。けれど、アンジェラはエリスにとって妹みたいな存在だった。

その、アンジェラがくすりと笑った。いつもの、迷いのない真っ直ぐな笑み。

「馬鹿ねえ、エリス。今さら言うこと？ それ」

照れているのかもしれない。いやもしかしたら、もつと違う意味があるのかもしれない。とにかくアンジェラは、そこで言葉を切ると、一度だけ視線をはずし、それから再びこちらを見つめてきて、言った。

「……エリス。私、止めないからね」

それは、二人でいつか交わしたことのある『約束』だった。お互いの決めたことに、口出しはしない。そういう『約束』。

「……うん、ありがとう」

エリスが言うと、アンジェラは柔らかな笑みを見せた。

「……ひとつだけ、言っておくわ。あんたは狙われている。それは確かよ。それに——」

こくり、とアンジェラの喉が上下に動いたのを、エリスは見逃さなかった。言いにくいことを口にするときの、アンジェラの癖だ。

「それに、さっき言ったでしょ。ルナの話」

「……うん」

再度、頷く。このハイアシンス・カツレを歩いている間に、アンジェラが話してくれた——というよりも、エリスが無理やり聞き出したに近いが——事だ。

「……なんだっけ。あたしが旧神殿で操られた、だっけ？」

確認のために聞いてみる。にわかには信じがたいことだったからだ。

「そうよ。その月の石……ペンダントが紅く光ってた」

見下ろす。それから、右手の人差し指で軽く紐を持ち上げてみた。紅の石が、小さく反射する。

女神ルナの使者が、生まれたときに持っている石。

エリスは小さな苦笑を漏らした。

この国から逃げるのは、そういったものを捨てたいがためなのに。
「結局……逃げられないって感じだね」

「わかってんじゃない。……どっちにしろ、国を出たところで、この大陸からは出る事は出来ないんだし……この、封鎖世界。魔導大陸ルナからはね」

アンジェラが、目を細めて顎を上げた。遠くを見るかのように。遠くにあるのはレイティディス山脈の姿だが、アンジェラの目はおそらく、それよりもずっと向こうを見据えている。

この大陸の外側、ルナ大陸海域の最果てには——結界がある。

アンジェラの目は、おそらくそれを見つめようとしているのだ。
「この大陸からは誰も出る事ができないし、他大陸から来る事も出来ない。女神が、大陸に結界をはっているから。そのことくらいは、あんただって知ってるでしょ？」

「……馬鹿にしないでよ。いくらなんでもそれ知らなかったら、あたしはなんなのよ」

「サボリ魔」

「……いや、サボってはいたけどね。学校はね。って、そうじゃないくて」

苦笑。確かに授業に関しては、よくエスケープしていたけれど、それ以前の問題だ。自国の国歌を歌えと言われて歌えない奴もまれだろうが、たとえそれが出来ない奴だったとしても、これくらいの『大陸の話』は常識として知っているだろう。

女神の結界に阻まれし魔導大陸、ルナ。

「……まあ、どっちにしろ。この国出ようと出まいと、ルナの手中から、この大陸からは出られないのよ、エリス？」

「判ってるよ」

「……それでも、家出、する？」

「——するよ」

アンジェラの口から、細い息が漏れた。

エリスはそれに気付いたが、気付かないふりをして、続ける。

「……あたしは、月の者でも、マグナータ家の……騎士家系の長女でもない。ただの、ひとりの、エリスって名前の……冒険者だ」

「……そ。もう、何も言わないわ」

アンジェラが笑う。けれど、何も言わないといったその口で、続けた。

「エリス。出て行くなら、好きにすればいい。私は止めないし、止める権利もない。けどね……ちゃんと、街の奴らには挨拶していきなさいよ？ パズーとか、カイリとか」

「……いや、迷惑かけたくないから、黙ってたんだけど」

エリスが家を出たことが知れたとき、アンジェラやパズー、カイリたちは、仲が良かったということで詰問されるだろう。それを、アンジェラだけに留めたかったのだ。だからこそ、黙っていたのに——挨拶なんてすれば、一発でおじやんだ。

けれどアンジェラはあっけらかんと言つてのける。

「バレないように挨拶なさい。礼儀よ」

かなりの難題のような気はする。

「……難しいんですけど」

「あんななら出来るわよ」

邪気のない笑顔に、エリスは思わず動いていた。手を伸ばし、アンジェラの細い体を抱きしめる。驚いたようにアンジェラの体は一度震えたが、何も言わず、抱き返してきた。

暖かい体温が、気持ち良かった。

「……気を、つけなさいよ。無茶すぎるの、あんたの悪い癖なんだから」

抱きしめているアンジェラの体が、そう言葉を発した。エリスも言った。

「あんたもね。……わがままばかり、言っんじゃないわよ？」

アンジェラの体が笑うように震えた。手を離し、向き直る。アンジェラの背後に、一番星が光っていた。

瞬きすら惜しむように、エリスはそのアンジェラの姿を瞳に焼き付ける。

「……じゃあ、私は帰るわ。……もう、二度と……逢う事もないかもね」

「……あたしは、この街に戻るつもりはないから。そうかも、知れないわね」

言葉が、途切れる。アンジェラが、細い手を出してきた。それを握り返しながら、緩みかける涙腺を閉めるのに、エリスは必死だった。

アンジェラは、笑った。

「じゃあ、ね。……エリス」

「……ばいばい。アンジェラ」

手を離すとき、少しお互いためらった。けれど、手のひらが離れ、親指が離れ、最後に人差し指が離れたとき、もうこれが最後なのだと実感した。

「……ばいばい」

その言葉が、最後だった。

アンジェラはエリスに背を向けて、ハイアシンズ・カッレを東へ歩いて行った。アンジェラの家の方に、だ。

ゆるいウェーブの髪が、左右に揺れていた。

アンジェラの背中は一度も振り返ることなく、宵闇色に染まり始めたセイドウール・シティに消えていった。

月は満ちていた。

中天にある、黄色い月。

春先の空にかかる月に、想いなどはない。あるとすれば、それはただ無理やりこじつけただけの、感傷に過ぎない。それは判っていた。けれど。

エリスは真夜中の空を見上げ、小さく口を開いた。

「——あんななんかのために、あたしはあるんじゃない」

誰に向けていつているのか、自分でもよく判らなかった。だが、言わずにはいられなかった。

月は何も言わず、ただ雲間に揺れていた。

嘆息を、ひとつ。

エリスはむりやり月から目を離すと、自室に向き直る。

ぬいぐるみやら、本やら、絵画やら、そういったものが適度に置かれてある部屋。だがいつもより、幾分簡素に見えた。ベッドの上に乗っかっている大きなバックパックが、それらを簡素に見せている原因なのかもしれない。

ぬいぐるみが一体と、服が何枚か。寝袋に、お気に入りの詩集が一冊、あとは救急セットやお金やなんかの小物類。それらがぎゅうぎゅうに詰め込まれている。

それらを目で確認してから、エリスは窓際の椅子から立ち上がった。物書きデスクへと移動し、デスクの上に広げてあったバンダナを手にする。

青い、バンダナ。

今日、アンジェラと別れた後、手に入れたものだった。

アンジェラの『言いつけ』通り、エリスは少ない友人達に『挨拶』をしてまわった。

ばれないようにするのはなかなか難しく、たいていの人々には『

いきなり何いってんの？ おかしな奴』というありがたくもない感想をもらってしまった。だが、一人だけ違った。

カイリだ。

カイリは——気付いていたのだろうか。もしかしたら。そう思う。エリスはカイリの家へ行き、だが何を言えいいのか判らずにぼんやりとしていただけなのだ。だが、カイリはしばらくの沈黙のあと、苦笑した。

『そうそう、渡そうと思って、ずっと忘れていた物があるんですよ。そういつて、青いバンダナを渡してくれた。青という色彩の物をプレゼントにもらうのは、実を言うとはじめてだった。たいていの友人は、エリスには赤い色が似合うとプレゼントも赤いものをくれる。』

それなのに、カイリは青いバンダナを渡してきた。

『青だね？』

『青ですよ』

くすくすと笑うカイリの表情は、柔らかかった。

『赤ばっかりだと、だれるでしょうから。こういう色を入れると、また気持ちも引き締まるでしょう？ 似合うと思ったんですよ、逆に』

答えに窮したエリスにはかまわず、カイリはこうも言った。

『無茶、しないでくださいね』

その台詞を思い出し、エリスは苦笑を漏らした。

（ていうか、絶対気付いてるよね、あいつ）

昔から勘が良かった。誰よりも。だからきつと、気付いている。デスクの上の真新しいバンダナを手にとって、エリスはそれを頭に巻きつけた。鏡を見て、自分でも驚いた。確かにカイリの言うとおり、ただ赤いだけよりもずっと引き締まって見える。

（ありがと）

口には出さず、呟く。カイリに。アンジェラに。心配してくれていたパズーに。友人達がこの街にいる。きっとここで頑張って生き

ていくのだろう。それは、エリスにとって寂しいことでもあり、けれど絆として残していける強い思いでもある。

あいつらが頑張っている。だから、あたしも頑張らなきゃいけない。そう思える。

壁にかけてあった剣を手取る。バックパックを背負い、顎を上げた。

十四年間過ごしてきた、自室。

十四年間過ごしてきた、家。

きつと二度と戻らない、場所。

「さよなら」

呟く。

「——もう、戻らない」

戒めの言葉のように、呟く。

ここからは、誰のためでもない。自分のために、自分の足で、歩く。

板張りの床を踏みしめ、最後になるだろうその感触に目を細め、けれど、顎は上げたまま、エリスは歩いた。

さようなら、ともう一度呟いて。

自らの意思で、エリスは住み慣れた家を出た。

セイドール・シティの大通り、サンラバーズ・サリツザードを辿っていく。街灯の明かりより、頭上から降る月明かりのほうが眩しいくらいだった。影が二つ、街灯と月明かりとに照らされて違った方向に伸びている。

さらさらとした水路の音が、昼間はあんなに耳に触っていたとい

うのに、夜の今は心地よかった。

はつきりと判る。それ以外に音はしない。

静かだった。静かすぎた。

おかしなくらいに。

——虫の音すら、しない。

「……………」

鼻から小さく息を漏らし、エリスは足を止めた。セイドウール・シティの入り口に程近い、アグライア・カンポ（輝き乙女の広場）。色煉瓦で造られた、幾何学模様の地面。深い緑の街灯と、同じ色のベンチ。広場の中央にはアグライア——裸身の童女の石像と、噴水がある。比較的大きな広場だ。

そしてここは、カナーレ・ローダという大きな運河が近く、ある意味で隠れやすい場所とも言えた。水音が、僅かな音ならかき消してしまう。

だが、エリスの肌はそこにいる何者かの気配をしっかりと捕らえていた。

「——出てきなさい」

我ながらシャープな声だと思った。感情が入り込んでいない、高い位置からの音。

エリスはどさりとバックバックを地面に放り出した。文字通り肩の荷を下ろしたあと、軽く体をゆする。腰につけた剣の鞘を左手で握り、右手で引き抜く。僅かに刀身が光を反射した。我知らず、柄の傷を探して指が動く。

「ばれてるって言うてるのよ。早く出てきなさい」

二度目の呼びかけに、今度ははつきりと気配が動いた。ぴんと張り詰めた夜の風が、エリスの真新しいバンダナを揺らした。

左だ。

煉瓦で作られた、低い花壇の後ろ、幾本か並んでいる植木。そこだ。エリスは視線だけをそちらに飛ばした。

闇が、現れる。人影となって。

中肉中背、と言っていいだろう。とどのつまり、小柄なエリス自身から見れば、僅かに顎を上げないと向かい合えないということだが。ゆっくりと、体全てをそちらに向ける。

全身を闇色の衣装で包んでおり、顔すらもはつきりとは判らない。僅かに、黒い鋭い目と、いびつに歪んだ鼻が覗いているだけだ。武器らしい武器も持っていない。暗器の類なら、いくらでも持っていそうではあるが。

「かくれんぼなら、もう少し子供の頃に誘ってほしかったね」

この手の物言いは、相手のレベルを探るときにエリスがよく用いるものだ。昼間の男は感情を剥き出しにしてきた。だが、プロと呼ばれるレベルに達したものだ、感情を見せてくることはない。

「そこ、あたしも昔かくれんぼのとき、よく使ったんだ。同レベルだね？」

「——エリス・マグナータ、だな」
プロだ。

瞬間、それだけを理解した。先ほど自分が発した声もシャープだと思っただが、それとは比べ物にならないほど、男の声は鋭かった。

鋭利すぎて、触れてもいないのに斬られてしまいそうな、そんな声だ。肌が粟立つ。

「そつだよ。いちいち訊くんじやないっての。下調べぐらいしてきなよ」

震えないように、張り詰めた声で応じた。気を抜けば殺られる。まず、間違いなく。不安を見せたら、その時点で終わりだ。街を出る前に、あの世へ行ってしまう。

そんな気がした。

エリスの内心を知ってか知らずか、男が声を発した。

「アンジェラ・ライジネスは一緒ではないのか」

「——！？」

衝撃が走った。

その名前を聞くとは、思わなかったのだ。

狙われているのはエリス自身のはずだ。事情は判らないが、月の石を狙う者がいる。それがエリスが狙われる理由のはずだ。だって、何故、アンジェラの名前がでる――？

「アンジェラが、どうしたのよ」

かすれた声は、感情を抑えきることが出来なかった。はじける。

「あいつになんかしたら、あたしが許さないわよ！」

それは、一瞬だった。

「――ダリード様の命令により、貴様を殺す」

景色が流れた。

いや、正確に言うならば、自らの動きに視覚神経が一瞬追いついてこなかっただけだ。

エリス自身よく判らないままに、地面を蹴って後方に跳んでいた。そのとたんに理解する。太い錐のような武器が、喉もとめがけて伸びていた。体が避けるためにとっさに反応したのだろう。だが――早い。

「っ……！？」

一度きりのとっさの跳躍では、逃れきれない。右足が地面に触れた。もう一度、跳ぶ。水路が近いせいだろう、湿った空気が肌にまとわりついた。

再び、足の裏に地面の感触。いや、かかとは、僅かに感触がない。肩越しに視線だけで振り返る。

（カーナレ・ローダー！）

真後ろに、運河が迫っていた。跳びすぎたのだろう。かかとはすでに地面からはずれ、水の上にあった。逃げられない。

「くそっ！」

膝を緩め、追いつがる武器から逃れるために、体を右へ傾ける。反動で地面の煉瓦が崩れ落ちたのだろう、静かな水音が響いた。

緩んだ左膝のバネを使い、すくい上げるように右手の剣を振るった。手ごたえはない。間合いが広がる。

僅かに息をつく。時間にして、僅か数瞬の出来事。速い。

エリスは剣を構えた。右肩を小さくひき、見据える。

間合いを外されては敵わない。腹筋に力を入れ、今度はエリスから飛び出した。

「——ヒュッ」

口から漏れた呼吸は、ほんの少しだけ音になったが、あとはただの空気ではなかった。黒ずくめの人影の気配が、揺らぐ。こちらのスピードに、一瞬反応が遅れたらしい。跳ばれたが、追いつがる。間合いはこちらにある。あらなければならぬ。

湿った空気を薙ぐ。小さな手ごたえが、今度はあった。だが、意味はない。服を僅かに裂いただけではない。

その瞬間だった。

「……っあ!？」

激痛。

脳に飛び込んできた情報はそれだけだった。何処にそれが起きたのか、何が自分の身に降りかかったのか、エリスはよく判らなかった。慌てて左に跳ぶ。

青臭い水の匂いしかなかったセイドウル・シティの空気に、鉄の臭いが混じった。血だ。

そこまできて、ようやくと理解した。怪我をしたらしい。

(……どこ……)

痛みにかすむ脳をだましだまし回転させる。痛みの箇所が、ゆっくりと明らかになった。腹部。ちょうど、右わき腹のあたりだ。視線を落とすと、黒い液体で濡れているのが判った。黒い——いや、もっと光のある場所では、それは赤に見えるはずだろう。

(なんで? いつ、怪我した?)

あの瞬間、間合いはエリスにあったはずだ。相手の武器の間合いではなかった。なのに、何故?

疑問は途切れざるを得なかった。

黒い風が流れた。

跳ぼうとして、カナーレ・ローダの事を思い出した。跳びすぎると、落ちかねない。逃げるかわりに、防御すればいい。吹き付けた風に剣を向ける。

ジャリ、と妙な音がした。風が正体をあらわす。

(……チェーン?)

黒光りする、ぎざぎざと小さな刃のくつついたチェーンだ。それが、剣にまきついていていた。

思い当たる。

「邪道だね。暗器なんて」

エリスは唾とともに吐き出した。これだ。自分を傷つけた武器だろう。出血の量と痛みは、この妙な形の刃のせいだ。肉が真っ直ぐ切れなかったその分、痛みは強い。

やはり、持っていたのだ。暗器。邪道な武器だ。うかつだった。初めに思ったはずなのに。暗器なら、いくらでも持っていそうだと。

出血個所を左手でかばい、ゆっくりと後退した。怪我はそう酷くはない。深い傷ではない。だが、痛みは激しい。治りも遅いだろう。それこそが暗器の特徴でもあるといえたが。

勝率は五分だった。けれど今は——判らない。

(くそっ!)

内心毒づき、チェーンを振りほどくために剣を引つ張った。するとチェーンが解ける。いや、違う。相手がそう仕向けたのだ。再び、まるで使い手に操られた蛇のような動きで、そのチェーンが襲い掛かってくる。弾けば、また巻きつかれる。そして動きが止まってしまうたら——別の暗器が襲ってくるのだろう。

(どうすりゃいいってのよ!)

対処法がわからず、エリスは胸中で悲鳴をあげた。

その瞬間、場違いな可愛らしい声が響いた。

「炎を司りし者よ。我が前にありし者に裁きを!」

声は可愛らしかったが、内容はやたら物騒だった。攻撃系の呪文。
(え……!?)

エリスは思わず我が耳を疑った。と、轟音が耳をつんざく。目を
焼くような紅い炎が膨れ上がり、熱風が吹き荒れた。肌がちりちり
と音を立てる。

しばらくして炎が静まり、エリスは目を見開いた。

「ア……ン、ジェラ……?」

別れたはずの親友の姿が、そこにあった。アグライア・カンポの
模様付けられた地面に、挑むように仁王立ちしている。細い体を包
む洋服は、普段と何ら変わらない。紫を基調とした、シンプルなデ
ザイン。こんな現場に居合わせているのが妙としか思えないような
スカート姿。その中で、月明かりをあびたゆるいウェーブの髪が、
静かに流れていた。

その彼女は、一度にこりと笑った。そして、とたた、と幼稚な足
取りでこちらに歩いてくると、あっけらかんと言つてのけた。

「夜は静かにしなくっちゃ、ご近所迷惑よ。だから、とつと片付
けるわよ、エリス」

ぴつと、アンジェラが細い指を伸ばした。黒ずくめの人影が、炎
にあぶられた姿で呆然と立ち尽くしている。

その姿を見ながら、アンジェラがにゅと笑った。

低い、けれどどこか楽しげな声で、告げる。

「私の親友いじめたら、殺すわよ?」

どうしてこうもあっさり、片がついてしまうのだろう。

痛みに揺れる意識の中で、それでもエリスは苦笑を漏らさずには
いらなかった。

戦いの過程そのものは、とりたてて単純だったわけでもない。た
だ、決定的に違ったのはエリスの心理状態だった。負ける気がしな

かった。

それがよかったのだろう。アンジェラと一緒に戦う機会はさほど多かったわけでもないが、それでも親友の呼吸は熟知している。戦闘の場と日常と、状況は違えど、それは変わらない。アンジェラの呼吸なら判る。彼女が今何をしたいのかは、理解できる。それが、とても戦いやすかった。

結果——これだ。

エリスは小さな嘆息とともに、地面に転がった男をつま先で蹴り上げた。ごろんと男が仰向けになる。息は浅いが、途絶えてはいない。まだ生きている。

が、放っておけばいずれ死ぬだろう。致命的とも言える傷を負っている。手加減をする余裕がエリスにはなかったのだ。左胸から袈裟ぎりに、一直線、赤い線が引かれている。その上からアンジェラの魔導という、ありがたくもないおまけつきだ。こちらは手加減できなかった、というよりはなから手加減するつもりはなかったらしい。

すぐにでも治療するべきだろうが、そこまでしてやる義理はない。明日の朝までもてば、誰かに見つけられるだろう。治療されるかどうかはまた別の問題だが、知ったことではない。

エリスはその男を放ったまま、アンジェラに向き直った。

右わき腹が、熱を持って痛みを脳裏に直接訴えかけていたが、それにかまうよりもまず、訊きたかった。

「アンジェラ……」

男を見下ろしていたアンジェラが、迷うような動作の後こちらを向いてきた。

「なによ？ 怪我なら、私はどうしようもないわよ？ 自分で何とかしてね」

「そうじゃなくて。……なんで？」

訊ねると、アンジェラはまた瞳を揺るがせた。それから、小さな苦笑を頬に浮かべ、

「エリス。あんたなんか、勘違いしてるわよ」

「え……？」

彼女はそのまま、落ちかけたショールを肩に戻しながら、笑った。
「昼間の話よ。ラスト・ミネアであった男。あんたと——私の名前、確認していたじゃない？」

ぎゅっと、心臓が痛んだ。そう、聞きたくはなかったが、今倒れているこの男も、アンジェラの名前を告げていた。

「……そういえば、そうだったね」

「でしょ？ てことは、よ？」

アンジェラは腰に手を当てて、簡単な方程式でも解くような口調で続けた。

「——私も狙われているってことになるわ、そうでしょう？」

（気付かなくてもいいことに気付くんだから……）

全く、勘がいいというか頭の回転が速いというか、なんとも複雑な気持ちで、エリスは押し黙った。アンジェラは気にせず、かぶせるように言った。

「ってことは。あんただけ逃げるなんてずるいわよ」

「いや、ずるいって……」

そういう問題ではない、と続けようとしたが、それをさえぎってアンジェラが軽い笑い声を上げた。屈託のない笑み。

「——だから、私も付いて行く。今さっき、決めたの」

どうとも表現の仕様のない思いが、浮かんた。アンジェラが一緒だったら、どれだけ心強いことだろう。だが、それはアンジェラを巻き込むことになる。彼女を危険にさらすことになる。

「……駄目、だって、アンジェラ。あんたはあたしに付き合うこと、ない」

「ばっかねー！ エリス」

アンジェラは大げさに溜息をついてみせた。頬に貼り付けた笑みはそのまま、告げてくる。

「人の話は聞きなさいよ。いーい？ 私は私の意思で、そうするっ

て決めたの。私の意思で、よ。それをあんに止める権利はない——違う？」

自らの顔に苦笑が浮かぶのを、エリスは自覚した。『約束』だ。お互いが決めたことに対して、干渉はしない。

「……アンジェラ」

思わず、その名をもう一度呟いた。親しみなれた名前。

アンジェラは答えず、地面に放つてあったらしい自分のバッグを拾い上げると、エリスに背を向け、そのまますたと歩いていった。

「さーさー、とつとと行くわよ、エリス！ 夜のうちに街は出たいものね！」

その後姿を見つめ——結局、こうなったアンジェラを止める術はないことを理解して、エリスは苦笑を漏らした。苦笑——いや、どうだろうか。本当はどこかで、こうなることを望んでいたはずだ、きっと。

アンジェラが、振り返って呼んで来た。

「エリス！」

ほんの少しだけ、遠くなって、けれどずっと近くなった親友は、満面の笑みを向けてきている。

その笑顔に促されるように、エリスは自らのバックパックを背負った。わき腹の傷の痛みは、なんだか知らないが薄く感じた。一応の手当てとして、バックパックから引つ張り出した包帯をきつく巻いておく。傷自体はさほど深くはないから、これで何とかなるはずだ。

そして——ふと、振り返る。

深夜のセイドウル・シティ。

水路に覆われた、水に浮かぶ都。

空には月が浮かんでいる。月はたった一つだけなのに、セイドウル・シティの水路には、同時にいくつもの月が揺れているのが、エリスにはなんとなく不思議に思えた。

（——ばいばい。セイドウール・シティ）

一言、胸中で告げ、エリスはアンジェラのほうを再び振り返った。遅い、とでも言うように、ぷつと頬を膨らませたアンジェラが立っている。

「——早く、エリス！」

「……うん！」

エリスは地面を蹴って、アンジェラに駆け寄った。アンジェラがその名のとおり、天使の笑みで答えた。

空には月が浮かんでいた。水路にはいくつもの月が揺れていた。月は満ちていた。

そして、時も満ちた。

アンジェラのわがままは、最高潮に達していた。

「眠いよー。ねえええむううういいいい！ 超眠い！ 無駄にねむーいっ！」

本日十二回目の台詞だ。

（んなの知ったことか）

などと内心毒づきながら、エリスはとりあえず言葉を返した。

「……天気良いしね」

春の陽気は幾分いつもより暖かい気はしたが、まあそれに不満はなく、あるとしたらやたらに眠気を誘うといったことくらいだろう。暖かいのは大歓迎だ。

後ろからとぼとぼ歩いてくるアンジェラの気配を感じながら、エリスはあごを上げた。

まだ低い位置にある太陽は、陽射しをきつく降り注いでいる。

陽光が木々の合間から煌いていて心地よい。が、逆に言えば遮るものがないと眩しすぎるほどだ。

（確かに、暖かいけど。ちょっと暑いくらいかなあ）

なんだかここ最近、気候が妙な日が多い。また冬に逆戻りか、と感じるような寒い日があるかと思えば、今日のように暑いくらいに暖かい日もある。

（大陸間の異常現象……か、な？）

魔物の大量発生なども最近問題になっているが、こういう気候に関する妙もまた、そういったもののひとつなのかもしれない。

ともあれ、このバジル街道の深い木々の間では、暑すぎるということもない。涼やかな風と、少しばかりきつい陽射しは、ちょうど眠気を誘うのに適していた。アンジェラのわがままもそのせいだと思ふことにする。

「疲れたよー」

違つたらしい。

「……まだ街を出て数時間しかたつてませんけどお嬢様？」

「昨日夜通し歩いたしー」

「宿までだけでしょ」

しかも行き道をずれてまで宿に寄つたのは、野宿は嫌だと言つたアンジェラのせいだ。

「ベッド硬かつたしー」

「安宿だから仕方ないでしょ」

もともと、アンジェラもエリスも、割と不自由なく暮らしてきた金持ちの娘だ。貴族家系のアンジェラにしても、騎士家系として地位を築いたマグナータ家の長女であるエリスにしても、安い宿といふのは実のところ初体験だった。

アンジェラの言う通り、安宿のベッドの硬さに寝付けなかったのは事実だ。エリスもそのせいで、疲れはとりきれていない。

（そのうち慣れるんだろうけどね）

というよりは、慣れざるを得ないのだろうが。

それにしても、アンジェラの不平不満は次々と言葉になって漏れて来る。

「エリス起こすの早いしー」

「あんたが遅いんだって」

「ていうか、マジ眠いよう」

「もー少し行ったらレナード村つてとこに着くから、今は起きてなさい」

「足痛いー。疲れたー。眠いー。暑いー。喉乾いたおなかすいたー！」

「やかましい」

呻く。振り返り睨み付けると、アンジェラがぶつと頬を膨らませた状態で足を止めた。

低く、言ってくる。

「——ていうか。ウザいよー」

「……それは同感……」

苦笑して、エリスは頷いた。自らも足を止め、空を仰ぐ。

バジル街道。整備もろくにされていない道は街道と呼んでいいのかなんのか知らないが、まあそう呼ばれている。ジャリ道と、両脇の林。鼻先をくすぐる濃い緑の匂いは心地よいが、森林浴としゃれこむわけにはいかなさそうだ。

アンジェラがさつと前髪をかきあげ、呟いてきた。

「出て来てもらおうよ」

「……賛成」

エリスはペンダントに一度触れ、それからその手で腰の剣に触れた。なじんだ柄の傷を人差し指のはらでなぞりながら、声をあげる。

「——ってなわけで。残念ながら気付いています。眠すぎてこの子無駄に気がたつてるみたいだから、早く出てきたほうが身のためよ」
数瞬の沈黙。ややあつて——風が流れた。

アンジェラが拗ねた表情のままですちらを向く。右手奥、街道脇の木陰。そこから、二つ、人影が出てきた。

——若い。

反射的に脳裏に浮かんだのは、その単語だった。

エリスはじつとその二つの影を見据える。

男だ。二人とも、背は高いほうだろう。エリスたちからすれば、頭ひとつ半は違う。年齢は——多少判りづらいが、十七、八、くらいか。アンジェラが小さく口笛を吹いた。

「カッコいいじゃん」

「あのね」

アンジェラのあっけらかんとした感想に、エリスは思わず苦笑を漏らした。

（まあ確かに。美形っちゃ美形、かな？）

一人はエリスと同じ黄色人種——いや、エリス自身とはまた少し違うらしい。目鼻立ちがはっきりしている。彫りが深い。セイドウィルでは、というよりは、この大陸西部ではあまり見かけない顔立

ちだ。異国人だろうか。

長い黒髪と、同色の切れ長の眼。体の線は細いが、弱々しい感じは全く見受けられない。

もう一人。こちらは白色人種然とした容姿だ。ルナ大陸で一番よく見かける人種の特徴をかねそなえている。丁寧にかットされた、陽光に輝く金色の髪と、翡翠のような碧の瞳。手足がすらりと長く、剣を携えてはいるが、正直あまり似合っているとは思えない。慣れた感じは受けるのだが、むしろ楽器でも持っていたほうが似合いそう。

その、白人のほうが口を開いた。

「エリス・マグナータ……アンジェラ・ライジネス」

澄んだ声だ。清水のような雰囲気すら、ある。

「どうでもいいけど。家名、やめてくんないかなあ……」

エリスは思わず嘆息を漏らしていた。家を出てきたのだから、自分にはもう家名を名乗る資格はないし、名乗りたくもないのだから、いいかげんやめて頂けるとありがたいと思う。最も、そんなことあちらがわには関係のないことではあるだろうが。

「そうだけど。なあに？ 悪役の世界には、相手を襲うときにはフルネームで呼びかけなければいけないとかいう法律でもあるの？」

アンジェラが飄々と言ったのけるが、それに構う様子もなく、今度は黒髪の男が口を開いた。

「気の毒だが、少々、手荒な真似をさせてもらっぞ」

その言葉に、エリスはアンジェラと顔を見合わせた。違和感が、二つ。

（……アクセント、こっちの方のじゃないな。東部訛り……？）

完全に訛っているわけではないのだが、微妙な違和感がある。この辺り——西部ではあまり聞き慣れない音だ。それが違和感の一つ。もう一つは、台詞の内容そのものだ。アンジェラが肩をすくめて続けた。

「へえ。案外紳士なんだ。でもね、お兄さん。女の子を襲うのは、

感心しないわよ?」

(だよねえ)

わざわざ襲うのに断りを入れてくる奴というのも珍しい。エリスは苦笑して、言葉を投げた。

「まあ、それはいいけど——で、お兄さんたちのどっちが『ダリード』さん?」

びっくり、と白人男の眉が動いた。黒髪のほうは、全くの無表情だ。気付いているのかいないのか、隠すのが上手いだけなのか知らないのか、それすら読み取れない。

ダリード。昨日聞いた名前だ。といっても、あの男が言っていたのは『おまえ達と同じ年頃の』だ。この二人だとしたら少しばかり年かさになるのだが。

どちらにせよ、この反応——全く無関係ではなさそうだ。

「昨日、ラスト・ミネアで聞いたんだけど。『ダリード』さんとやらがあたし達狙ってるらしいんで。手ごまじやなけりや、あんた達のどっちかがそうなんでしょ?」

挑発するように肩をすくめ、剣から手を離す。乗ってくるか否か。いちかばちかの懸けだ。

黒髪の男が、薄く唇を開いた。

「——ダリードとは、関係ない」

(……!?)

「エリス……!」

アンジェラが警戒したように小さく声をあげてくる。

知らないわけでもない。雇われているわけでもない。本人でもない。

——関係ない。

(別口……!?)

そうとしか考えられなかった。しかも『関係ない』と言う事は、この二人は『ダリード』とやらを知っている、確実に。

「どうということよ!」

アンジェラが甲高い叫び声を上げた。黒髪の男が、淡々とした口調で続けた。

「――俺はドウル」

「……ッ！」

唐突にエリスの肌が粟立った。膨れ上がる強烈な殺気。

反射的に足をひき、アンジェラを引っつかんで退がらせた。

危ない。

脳がその言葉をしきりに発している。

危ない。こいつらは、危ない。

もう一人の白人男が、口を開いた。

「――おれは、ゲイル……いくぞ！」

「来ないでいいわよっ！」

反射的にだろう、アンジェラが悲鳴のように叫んだ。そのアンジェラを背後にかばい、エリスは慌てて剣を引き抜いた。

――イヂギイツ！

重く、齒の根の浮きそうな音がバジル街道の空に響く。同時にエリスの腕にしびれが来た。噛みあった剣を滑らせるために、角度をつけて無理やり流す。白人男だ。ゲイルと名乗っていたか。

（こいつ……案外やる！）

上段から振り下ろされた剣の威力は、ただ力任せにただだけのレベルではなかった。練りこまれた威力がそこにある。

エリスはアンジェラから離れるように距離をとった。この男、スピードもそれなりにあるようだ。昨晚の男に比べれば、スピード自体は遅いが、それでもエリスに付いてこられるのだからかなりのものと言える。

男――ゲイルはそのまま、こちらにむかっってきた。流された剣に左手を添えて引き戻すと、そのまま突きに転じてくる。後ろに下がればアンジェラがいる。エリスは反射的に左に跳んだ。

「……っ！」

紙一重。鼻先を剣がかすった。エリスが左に跳んだ瞬間、ゲイルは突くのをやめて剣を薙いだのだ。

ド、ド、ド……と、心臓が恐怖を感じて鼓動をうるさくさせている。祈る。少し静かにして、後でいくらでも怖がつていいから、今は静かにして。

しゃがみこみ、エリスはすくい上げるように剣を振るった。ゲイルが跳び退り、間合いが開く。

と、そこへアンジェラの声が降り注いだ。

「——炎の精霊よ、風の精霊よ！ 共に我が腕に今来たれ！」

呪文。唐突に炎が膨れ上がり、風が吹いた。そのまま、ゲイルに向かって熱風が襲い掛かる。助かった——とエリスは一つ溜息をつき、背後から援助をしてくれたアンジェラに親指を立てた。

「サンキュ、アンジェラ！」

「どーいたしましたっ！」

にっとアンジェラが笑い——その顔がそのまま固まった。

「——だめ、エリス！ 跳んで！」

「……っ？」

訳も判らず、言われるがまま跳ぶ。次の瞬間、いままでエリスがいたその空間を、ゲイルの剣が薙いでいた。

「効いてない……！？」

アンジェラが悲鳴のような声をあげた。先ほどの魔導が、全く効果をなしていない。アンジェラが慌ててこちらに走り寄ってくる。

「どういうこと、アンジェラ！」

「わ。わかんないわよう！」

「——風に干渉しただけだ」

ゲイルが、淡々とした口調で告げた。

（風に干渉——？）

魔導に疎いエリスにはさっぱり判らない言葉だったが、隣のアンジェラが息を飲んだので、それが酷く異常なことらしいというのは

理解できた。

と、今度はいままで成り行きを見守っていただけの黒髪の男——ドゥールが、ずっと右腕を上げた。武器は持っていない。

「なに……？」

思わず眉根をひそめる。ドゥールはそれには答えず、静かな表情のまま、パチン——と指を鳴らした。

その瞬間、自分の身に何が起こったのかエリスはよく判らなかった。

ただ言えるのは、脳が拒絶反応を起こすようなレベルでの爆発音があったという事。そして、周りの木々が数本壮絶な音を立てて倒れたという事。視界が煙に閉ざされたという事。最後に、自分の肌のおちこちに、裂傷が生まれたという事だけだ。

「きゃっ……！」

アンジェラの悲鳴が聞こえ、慌てて彼女をかばうように腕を回した。身長差で言えばほとんど変わらない——どころか、実はほんの僅かアンジェラのほうが高いのだが——彼女は、エリスの腕の中で身を縮めていた。瞬間的な『何か』が収まった後、エリスは我知らず閉じていた目を見開いた。

アンジェラの体が、震えている。

「——アンジェラ、怪我は！」

「……擦り傷……ひっどーい！ 乙女の柔肌傷つけて！」
大丈夫そうだ。

頬や手足に赤い線が走っているが、大きな傷は受けていない。エリスはほっと安堵の息をつく、アンジェラから離れる。

剣を握りなおし、向き直った。

「一体、なんなのあんた達は。変な魔導使いね？」

「魔導じゃ——」

エリスの言葉に反応したのは、ゲイルでもドゥールでもなく、アンジェラだった。彼女は細い体を震わせながら、悲鳴のように叫んだ。

「法技じゃないわよあんなの！ あれじゃ、あれじゃまるで——」

「魔法、か？」

その言葉を引き継いだのは、ドウールのほうだった。感情すら見えない黒瞳に、僅かに光が反射する。

（魔導……法技？ 魔法？）

エリスにすれば、どれも同じに思えるのだが——少ない知識を呼び起こし、考える。法技は一般的に使用されているもの。魔法は——ふと、思い当たる。

魔女、特殊能力者しか使えないはずだ。アンジェラの『先見』の能力と同じ——！

「そうよ。あんたたち何者よ！」

アンジェラの声に、男達はお互い一度視線を交わすと、黒髪の一——ドウールのほうが、一歩前へ出て来た。胸元に手を入れ、そして引き出す。

バジル街道の木々の隙間から降り注ぐ太陽光が、引き出されたそれに反射した。

赤い、小さな石——

どくん

「……月の石……っ！」

アンジェラがかすれた声をあげた。

エリスは反射的に、左手で自分のそれを握っていた。月の石。あの男が持っているものと同じ、月の石——

「……じゃあ、じゃああんた……エリスと同じ……月の者——！」

肯定も否定もせず、ドウールはそれを再び胸元にしまうと、また一歩、前に歩み出て来た。ゲイルも同じように近づいてくる。エリスとアンジェラは、それに反応するように二歩、後ろに下がった。

「エリス」

右隣に立っていたアンジェラが、エリスにだけ聞こえる声でささやいてきた。視線だけで促す。

「——ここから村まで、後どれくらい？ 走っていける？」

アンジェラの質問の意味が判らず、エリスは眉を寄せた。一番近い村はレナードという名前だ。一度だけ行った事がある。そう遠くはない。ここからだ——

「……走れば、十分つてとかな。走るの？」

アンジェラは答えず、男二人をにらみやったまま、エリスの手を握ってきた。剣を持つその手を握られて、反射的に振りほどきそうになったが、アンジェラの手の力が思いのほか強く、やめる。乾く喉に無理やり音を発してもらう。

「なに、アンジェラ」

「——十分、か。ちよつと……辛いわね」

アンジェラの横顔に、挑むような笑みが浮かんでいた。その表情に、エリスの心臓が高鳴った。酷い不安感。

「アンジェラ、あんた……まさか！」

「——やるしか、ないでしょう。ちよつとだけ無茶するわよ。死んじやったら——ごめんということだ」

「アンジェラ……！」

さらりといった言葉に、これからアンジェラがやることが危険度が高いものだと理解した。なんとなく判る。過去に一度だけ、たった一度だけだが、見たことがある。あれをやるうというのだ——！しかしエリスが止めるまもなく、アンジェラがあいていた右手を上げた。声高に、叫ぶ。

「我が中に眠りし時の力よ！ 我アンジェラ・ライジネスが命ずる！
我に先の未来を見せ、我らが時を進ませよ！」

——視界がぶれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3494z/>

紅月は女神の祈り

2011年12月16日21時55分発行